

「飯館の店はもっと良かったのよ」

福島市内で再開した珈琲店の奥さんは言った

(レポート / 菊池京子・写真 / 小松崎栄)

ー)

東京への戻り足になる前に、コーヒーを一杯。立ち寄った珈琲店は飯館村から避難した方々が開いておられるお店です。店主夫妻の奥さんが「何を置いても持って逃げたかった」という焙煎機で炒って淹れられた一杯は香り高くほっとさせるものでした。

(レポート / 菊池京子・写真 / 小松崎栄)

ー)

〈飯館村から福島市へ、珈琲店も避難した〉

福島市の官庁などがある界隈から東北線・東北新幹線を挟んだ西側に出るとじきに住宅地が続きます。その中に、飯館村から避難して営業しているカフェがあるというので寄ってみました。

店の名は桎久里(あぐり)福島店。飯館村出身のご主人と奥さんが平成4年から飯館村で始めた元々のカフェは、自家生産の野菜と自家焙煎のコーヒーの店として地元根付いていた喫茶店&野菜販売所でした。

その桎久里が原発事故から避難、平成25年7月に福島駅から1.5kmの阿武隈川支流の荒川の畔に建つ移築古民家の一部を借りて営業再開したと聞きました。

『多少なりとも話が聞けたらありがたい』と思いましたが、日曜の午後とてお客さんがいっぱい。奥さんの市澤美由紀さんと少しだけ言葉を交わすことができたのみでした。

香り高く美味しい珈琲と焼き菓子をいただき、「おいしいですね」と言うと、「お客さんがたくさん来てくださって、おかげでこうしてやっています。ありがたいです」という返事。太い梁の天井が高く、広い窓の外に広がる景色—河畔の緑があふれる景色が気持ちいいので「いいお店ですね」と感想を口にすると「飯館の店はもっとよかったんですよ。窓からはもっともっと緑がいっぱい見えてね」と、美由紀さんは頬をわずかにキュッとさせて口角を上げ、ウインクしそうな微笑みを見せてこう答えました。

帰路を急がねばならないので、30分ほどで店を出ましたが『また来たいなあ』と思って屋根の高い古民家を振り返りました。店の駐車場は降ったり止んだりしていた雪で湿っています。車内の線量計で0.09μSv/時。2台とも同じ値でした。

〈福島の人声にもっと耳を傾けることが大切〉

桎久里を出て帰路につきました。高速道のインターまでさらに少し西へと走りますが、正面は灰色の雲が濃く空を覆っています。晴れていれば正面には山上に小型の富士山のような吾妻小富士が突き出し、一切経山の噴煙が見える吾妻連峰を望めるはずですが、この日は冬型の気圧配置でこの吾妻連峰を境に西は雪。その雪の向こう側は山形県の大雪の降る米沢市、吾妻連邦は冬の天気の水嶺なのです。

伊達市の仮設で会った長谷川さんのご家族を思い出します。

原発事故による放射能汚染被害では、原発立地町村はもとより飯館をはじめとする福島県内各地、他府県からも避難している方々は十数万人といわれます。子どもや若い人

たちの健康被害を回避する目的から、元々はいっしょに住んでいた多くの一家が親世代、子世代で別々に暮らすこと、親子・夫婦・兄弟姉妹など家族が離れ離れで暮らすことを余儀なくされているという異常な事態がもう3年近くも続いています。

しかも原発と放射能汚染の解決の見通しは立たず、除染も遅々として進んでいません。また、進めても除染後にさらに線量が高くなったり変動したり。放射能は人間の手に負えないことが年を追って明らかになり、福島や一部の関東の地では、風景はその事実の下でもう3度、四季を繰り返して来ました。

3度巡った季節の中に、個々人や個々の家族がそれぞれの決断で家族と暮らしと生活のあり方を決断しなければいけないという理不尽な現状が厳然としてあります。そんな家族は幾家族、幾世帯あるか、幾人に及んでいるのか。現実には即した正確な数字はどこも把握できてはいないのではないかと、私はいつも新聞発表などの15万人とか16万人とかいった数字を見るたびに疑問に思っています。

日帰りで福島県中通り地方を南北に往復しましたが、わずかな方と接しただけで、また、ささやかな家庭用の測定器で放射線量を測定しただけで、報道やネットの情報で知るよりはるかに現状は厳しいことを肌身で実感しました。そして原発事故とそれに由来するあらゆる被害がどうなっているか、社会の関心が非常に薄れて来ていることの深刻さがより厳しい状況を生んでいることに大きな危惧を抱きつつ帰って来ました。

長いレポートになったのは、そうした危機感によるためでもあります。

今後も折りにふれて、多くの方に知っていただくために、目と耳と足で知ったこと、見たこと、触れたことをレポートして行きたいと思っています。

(全3回連載 了 2014年1月6日)